

若者をつくる、日本の未来 —いなかインターンシップの挑戦—



宮脇 綾子
南の風社編集部
(高知市)

若者が『いなか』の未来を語るとき

「木を使う文化は、森を守ることにつながる。林業と、それを担うこの地域には未来がある」——20歳の若者が全国から集まった同世代の仲間たちへ、四国のド真ん中で叫んだ。

高知県嶺北地域は、四国3県と接する四国のへそ。森林率約90%という、林業や農業などの一次産業を主軸とした地域である。とはいえ、林業といえば外材の輸入に押され、自給率は下降し、「衰退」といわれてきた。どうして若者が、林業や地域の未来を語るようになったのだろうか。

若者×『いなか』の可能性

『いなか』と聞いて思い浮かぶのは、過疎高齢化、仕事がない、帰りたいけど帰れない……といった言葉かもしれない。また、現代の若者像といえば、ニートやフ



仕事と暮らしの中で、地域の未来に共感する

リーター、引きこもりなど、これもマイナスの言葉で語られることが多い。さらに、社会人を世に送り出す大学など高等教育機関は、離職率の高さや働く意欲の低下など出口問題を抱えている。しかし、ふるさとや地方で活躍したい、農業や林業をしたいという若者は少なくない。もし、『いなか』に若者が住んだら、新しい仕事ができる関係ができれば、ここから未来が創られるのではないか。

06年夏、私たちは高知県嶺北地域を舞台に、若者と地域をつなぎ、お互いの成長を目指



辛いことがあっても、農業ならやっつけていける

若者の成長が、地域を動かす

す『いなかインターンシップ』をはじめた。

いなかインターンシップとは、若者が一定期間いなかに住み、そこで農業や林業など地域の仕事を担うことである。地域で活躍する社会人を「師匠」に、仕事を任せられ、地域での暮らしを体験する。

このうち、山荘で半年間インターンシップをした若者(大学2年・男)は、標高1500mの山小屋で、木や鉄板を切ったり、時には料理やお裁縫をしたりして、おもてなしをした。山荘に来る個人的なお客さんから毎晩いろいろな話を聞いた。インターンシップが終わって、「もう無理、できない」と言わなくなった。インターンシップを受け入れた経営者は、

特集 若者よ、地域へ行こう

人育てる場としての山荘経営ができる
 ではないか、と再認識した。
 地域で作られていた「染め木」という木
 を使ったアクセサリーの全国デビューを
 目指した学生（大学2年・女）は、その素
 材に魅力を感じ、まちの人の反応を職人
 に語りかけた。副業だったアクセサリー
 づくりが、新しい商品として全国に発信
 できるかもしれないと、産業の可能性を
 職人に感じさせた。

地域を巻き込んだ若者プロジェクト

さて、冒頭に「いなか」の未来を叫んだ
 学生も、製材会社にインターンシップを
 した一人だ。大工の息子である大学1年
 生の彼に任されたのは、嶺北の木材に安
 心安全、高付加価値のお墨付きをあたえ
 る「緑の循環」
 認証（SGE
 C）の申請書
 類一式をつく
 ること。1か
 月弱地域に住
 み、林業や製
 材業の過程を
 学びながらの
 仕事だった。
 デスクワーク
 だけではな



「父」と「息子」が意気投合

く、時には森へ、時には県外の会合へと経
 営者と時間をともにした。経営者が語る
 「これからは、林業の時代」という言葉に、
 自分に課されている仕事の意味や、林業
 の未来を感じた。インターンシップ最終
 日に地域で行われた会議にも出席し、子
 どもたちへの環境教育を提案した。
 インターンシップを受け入れた経営者
 は、日頃思い描いていたことを打ち明け
 た。「消費者よりも木材を選ぶ立場にある
 設計士。その卵たちに、この嶺北で木造建
 築を学ぶセミナーを開いてはどうか。若
 者が対象なら、若者同士でサポートして
 はどうか」。その思いに共感したインター
 ンシップ生は、企画書作りから協力者探
 しや資金集めに奔走した。
 半年後の07年夏、全国から18人の設計
 士の卵と、10人の若者サポーターが嶺北
 に集まった。嶺北をフィールドに、森や木
 材、住まいを学び、それぞれの「森の未来」
 について提案を行った。廃校を利用した
 宿泊施設は、地域が無償で提供してくれ
 た。毎朝届くあたたかい朝食は、近所の婦
 人会のお母さんたちが作ってくれた。セ
 ミナー講師は、地域内外の林業家や設計
 士。費用の3分の2は県内の団体から補
 助を受けた。地域への思いをもった若者
 だからこそ、地域内外の大人を巻き込み、
 全国の設計士の卵という強力な応援団を
 つくった。

若者と地域が 共に育つコラボレーション

若者が地域に住み込むと、さまざまな
 コミュニティの中で暮らすことになる。
 スーパーや食堂のおばちゃんとも仲良く
 なり、宿として借りた集会所の大家さん
 には毎晩ご飯に呼ばれる。帰る際には「ま
 た来てよ」と声をかけられる。お世話に
 なった大人を、「父」や「母」と呼ぶ……。
 地域の大人と若者は、一緒に新しいこと
 に挑戦できる「仮の家族」になる。
 都市部にはない人間関係と地域の仕事
 に採まれ、若者はスキル面、マインド面共
 に一段一段ステップアップする。若者一
 人ひとりの成長が地域の大人を動かし、
 新しいうねりを生み出す手応えを感じて
 いる。



嶺北の未来をつくる、全国の応援団